

木琴

園長 山中 文

椋山女学園大学附属幼稚園には、年中さんと年長さんのクラスの間に共有スペース（なかよし広場）があります。そこに木琴が置いてあります。

20世紀に作曲家・教育者として活躍したカール・オルフ（ドイツ）は、子どもが自ら音楽を創造していくために、子どものための楽器を考案しています。それらの楽器は、オルフの楽器と呼ばれ、子ども騙しで安っぽい音ではなく心地よい音になるように素材を選び工夫して、子どもになじみやすい形で作られています。幼稚園に置いている木琴は、このオルフの考え方に基づいてつくられているものです。

一番低いバス木琴、中間のアルト木琴、高音のソプラノ木琴の3台をそっと置きました。どうやって使うかなあと思っておりましたら、まあ、最初の使い方のひどいこと！木琴のマレット（バチ）は、何度修繕しても何度買い足しても、ボキボキと折ります。見ると、頭上から木琴に向けて思い切り振り下ろしてます。眩暈がしそうです！

でも、子どもの側に立って考えると、こんなに音の鳴るものは、思い切りたたいてみたいものでしょう。いろんなたたき方も試してみたいはずです。そこで加減をしようとは考えないはずです。そんな子どもの気持ちも想定してつくられている楽器であろうと信じて、しばらく目をつぶっておきました。

木琴は、飽きないようで、いつも誰かがたたいています。お掃除をしてくれている職員が、「楽器の音はうるさいものだけど、あの木琴の音はいくら大きくたたいてもうるさいと思いませんねえ、いい音ですねえ」と声をかけてくれました。それを聞いて、「ああ、子どもたちも音を楽しめているかな」とほっとしたことです。

別のある時、わざと木琴1本1本をはずしておきました（この木琴は、全部の音をはずすことができます）。どうやって元の形にもどすかなと思ってのことです。子どもたちは、「誰がはずしたの！」と言いながら、木琴の長さを比べたり、音を聴いたり、木琴に書いているアルファベット（音名）を見たりして、ああでもないこうでもないと考えつつ並べかえました。なかなかいい工夫の場になりました。

そうこうしているうちに、どうも二学期になって、音がやわらかくなってきました。年長さんの担任の話にもよると、子どもたちは、音高を探ったり、メロディーを弾ける子どもの音に耳を澄ませたりして、いい音を出す加減を見つけてきたようです。そして、なんと、バチを折ることもぐっとなくなってきたのです。

物に対する約束事を伝えたり、言葉だけで守らせたりするのは簡単ですが、実は、子どもにはピンとは来ないことも多いものです。子どもたちがどうやったら自分たちで心地よさや加減を発見していくのか、この木琴は、そのひとつの方法を教えてくれるように思います。

